

全学共通教育の平成 26 年度実施に 向けた研修会 (FD) 報告

大学教育開発センター調査研究部編

第 1 部「全般的課題」では、本年度で 3 年目をむかえた全学共通教育カリキュラムの検証がテーマとされ、検証すべき点が概観された後、今年度調査研究部で行われた調査の結果についての報告が行われた。続く第 2 部「分科会」では、授業担当者を中心に 5 つの分科会に分かれて、より具体的な討論と情報交換を行った。

日時：平成 25 年 12 月 10 日 (火) 13:40 - 17:00

場所：教育学部 313 講義室ほか

対象：全教員 (特に平成 26 年度全学共通教育担当予定の教員)

第 1 部 全般的課題

1. 全学共通教育新カリキュラムの検証
2. 学問基礎科目相関図の効果検証
3. 各学部生の全学共通科目履修状況について
4. 全学共通教育に関する事務手続きについて

第 2 部 分科会

1. 主題科目「主題 A」分科会
2. 主題科目「主題 B」・学問基礎科目分科会
3. コミュニケーション科目「大学入門ゼミ」分科会
4. コミュニケーション科目「情報リテラシー」分科会
5. コミュニケーション科目「外国語」既修外国語分科会

以下、当日の提題者と記録者が中心となって報告原稿を作成し、研修会の企画・実施にもあたった大学教育開発センター調査研究部が編集をおこなった。

【大学教育開発センター調査研究部 (FD 部門)】平篤志 (調査研究部部長・教育学部)、葛城浩一 (大学教育開発センター)、佐藤慶太 (大学教育開発センター)

【その他の執筆者】田中健二 (共通教育部部長・教育学部)、斉藤和也 (共通教育コーディネーター・経済学部)、中谷博幸 (共通教育コーディネーター・教育学部)、寺尾徹 (共通教育コーディネーター・教育学部)、林敏浩 (共通教育コーディネーター・総合情報センター)、石井さおり (修学支援グループ)

第1部 全般的課題

司会：葛城浩一（大学教育開発センター） 記録：佐藤慶太（大学教育開発センター）

1. 全学共通教育新カリキュラムの検証

平 篤志（調査研究部部長・教育学部）

現行のカリキュラムの概要が確認された後、各科目群において検証すべき点、課題が次のように整理された。

主題A：各授業内容が全学共通教育スタンダードと対応しているか

適正な成績評価方法が採用されているか

主題B：学生の履修動向が把握できているか*

学問基礎：スタンダード（広範な人文・社会・自然に関する知識）との対応をいかにつけるか*

ディシプリンの観点から、提供すべき内容が吟味されているか

学部開設科目との関係をどのように考えるべきか

大学入門ゼミ：現在導入されているスキル教育が自己目的化しないためにどうすべきか

情報リテラシー：一回生におけるリテラシー・レベルにどう対応するか

既修外国語：更なるクラスサイズの縮小をどのようにすすめるか

習熟度別クラスにおける公平性をどのように確保するか

再履修クラスにおいて効果的な動機付けをするにはどうすればよいか

初修外国語：中級以上のクラスをどの程度開講すればよいか

健康・スポーツ実技：受講生のばらつきをどのようにコントロールすべきか

以上の課題のうち、*印をつけたものは、現在大学教育開発センター調査研究部において、共通教育コーディネーターによって検討が行われているところであり、続く二名のコーディネーターが、これら検討作業についての報告をおこなっている。全体に関することであるが、昨年度からコーディネーターを中心とした調査研究部の活動報告が第一部の内容として組み込まれるようになり、今年度の報告では、その活動がさらに精力的に行われていることがうかがえる。全学共通教育コーディネーター制度が、しだいに機能してきたといえるのではないだろうか。なお、各科目群の課題については、本誌の特集（3－9頁）でより詳しく記されているので、そちらも参照していただきたい。

2. 学問基礎科目相関図の効果検証

齊藤和也 (共通教育コーディネーター・経済学部)

先にも述べたように、新カリキュラムにおける学問基礎科目の課題は、香川大学が掲げているスタンダードとの対応をいかにつけるか、というところにある。具体的に言うと、学問基礎科目を履修することによって学生が「広範な人文・社会・自然に関する知識」を身につけられるようにするためにはどうすべきか、という問題である。このためには理系・文系科目に偏らない授業選択を促す必要があるが、そのための方策として昨年度から導入されたのが「学問基礎科目相関図」である(相関図の詳細については、中谷他(「大学教育研究第 11 号」2013)を参照されたい)。本年度は、この学問基礎科目相関図の効果を検証すべく、大学教育開発センター調査研究部において全学共通科目の受講生を対象にアンケート調査が行われた。この報告では、相関図作成のプロセスの確認、アンケートの実施方法、結果について説明が行われた(詳細については、本誌掲載の論文(19 - 25 頁)を参照)。アンケート結果にもとづいて、相関図には、学問基礎科目相互の連関の理解等に関して一定の効果が認められること、しかし認知度はまだまだ低く、教員、学生に対して効果的な周知方法を検討する必要があることなどが述べられた。

3. 各学部生の全学共通科目履修状況について

寺尾 徹 (共通教育コーディネーター・教育学部)

先にも述べたように、文系・理系科目をバランスよく履修するということがスタンダードとの関連において望ましいわけであるが、この問題を考えるためにはまず学生の履修動向の現状を把握しておく必要がある。今年度、調査研究部では、履修登録システムにおいて蓄積されているデータを用いて、各学部生の履修動向を洗い出す作業を行っている。この調査の狙いは、各学部・学科の履修状況とスタンダード、到達基準との関係を提供すること、相関図を念頭において、実際の履修状況との関係を検討するための基礎資料を提供する、というところにある。この報告では、上記の調査の狙いのほか、調査結果、今後の課題などについて説明が行われた(詳細については、本誌掲載の論文(27 - 41 頁)を参照)。調査結果に基づいて、全体としてバランスの良い履修が行われているとはいえないこと、文系学部、理系学部、学部間の違いがみられることなどが報告された。なお、この調査の結果は、カリキュラム検討や相関図作成のための資料として各学部、科目領域等へと提供されるとのことである。

第2部 分科会

1. 主題科目「主題A」分科会

司会・記録：葛城浩一（大学教育開発センター）

本分科会では、来年度新たに担当していただくことになった3名の先生方に、来年度の授業内容・計画等についてご紹介いただいた。3名の先生方が扱われる青年心理学や道德教育、労働法といったテーマは、主題A「人生とキャリア」にとって非常に重要な要素であるにもかかわらず、これまで欠けていた要素である。そのため、これらの授業に対する期待が大きなものであることをふまえたうえで、部会長から以下の2点についての確認がなされた。ひとつは、主題Aの主たる目的のひとつである「市民としての責任感と倫理観」の育成について、授業の中で意識的に取り扱ってほしいという点である。特にシラバスには、授業計画で当該内容を取り扱っていることが一目でわかるような形で明示してほしい旨、確認がなされた。もうひとつは、学生にわかりやすい記述を意識してほしいという点である。3名の先生方の授業内容・計画は非常にすばらしいものであったのだが、それを受講する1年生の目には少々固い、あるいは専門的な内容にみえる可能性があったからである。これらの先生方のご協力によって、来年度の主題Aではこれまでもまして充実した授業を提供できそうである。

2. 主題科目「主題B」・学問基礎科目分科会

司会：寺尾徹（共通教育コーディネーター・教育学部）

記録：中谷博幸（共通教育コーディネーター・教育学部）

例年の分科会では、「主題科目B分科会」と「学問基礎科目分科会」とが独立して行われてきたが、今回は、第一部の寺尾徹共通教育コーディネーターによる報告「各学部生の全学共通科目履修状況について」が、双方の分科会と関連をもつため、合同で行われることになった。

参加されたのは10名程度であったが、その多くが、今年赴任されたり、次年度初めて全学共通教育の講義を担当される方々であった。そのため、各学部において学問基礎科目が幅広く履修できるような状況になっているか、また主題Bはその点を補うような役割を果たしているか、といったテーマに踏み込んで議論することはできなかった。

今回の分科会では、全学共通教育スタンダードの内容を確認し、教員が講義を担当する上で問題となりそうな具体的な問題（シラバス記載上の注意点、受講制限はどのような場合にできるのか、講義での資料配付の仕方等々）について、情報交換を行った。その点で、次年度の実施に向けた具体的なFDの機会となった。学問基礎科目の場合、その講義を行う教員の母体となるのは、各科目領域教員会議であるが、一部を除いてあまりそこで必要な情報交換や議論がなされていないのではないかとということが、問題点として浮かび上がってきた。また、今年度『修学案内』と『シラバス』に「学問基

「基礎科目相関図」が掲載されたが、案外教員がその図を知らないようで、次年度『教員ハンドブック』にも掲載してはどうかという提案がなされた。

3. コミュニケーション科目「大学入門ゼミ」分科会

司会・記録：佐藤慶太（大学教育開発センター）

大学入門ゼミ分科会には 16 名の参加があった。まず大学入門ゼミ実施部会長である司会より、大学入門ゼミの概要と平成 25 年度の実施状況、学生アンケート結果について報告が行われた。長期的な課題として、大学入門ゼミを各学部がカリキュラムの中に明確に位置づけ、年次ごとに教育の積み重ねをしていく仕組み作りが必要であること、学力差がある学生たちに対して、どのようなスキル教育が有効か検討しなければならないこと、などが挙げられた。また、前年度の担当者が継続して大学入門ゼミを担当し、前年度の課題等を新規担当者に伝える、という仕組みをとっている学部がいくつかあり、これらの学部では継続的な取組ができているという指摘があった。

次いで、三宅教員（教育学部人間発達環境課程）と辻上教員（法学部）から、それぞれ大学入門ゼミの実践例報告がおこなわれた。人間環境発達課程では、共通コンテンツを合同授業で指導しているが、辻上教員のゼミの指導は、個別に行われている。参加者は二つの報告を聴くことによって、大学入門ゼミの実施形態としていろいろな可能性があること、それぞれの実施形態のメリット、デメリットなどを理解することができたように思われる。

最初の報告で紹介された人間発達環境課程の大学入門ゼミは、読解力向上をテーマに全体が組み立てられているところが特徴的である。授業では、①小論文程度の課題分の読解、②新書レベルの課題図書の見解（要約）、③課題図書の見解に基づいて、グループで問題＋主張＋根拠のパッケージを構成し、発表、という三つのステップが採られている。現在の大学入門ゼミにおける全学共通コンテンツは、アウトプット重視の傾向が強いので、こういった方針は他学部の教員にとって参考になるところが多かったようである。

辻上教員の実践例では、法学部生のためのカスタマイズが特徴的であった。印象的だったのは、辻上教員が「3 回学ぶ」サイクル、と呼ぶものである。すなわち、一つの項目に関して、①講義、②宿題、③解説という三つのステップを取り入れる、というものである。本人はこの方法のデメリットとして、90 分の授業時間内に何度か切り替えを行わなければならない、コマ切れになってしまうこと（たとえば 5 回目の授業で、第 3 回の宿題の返却およびコメント→第 4 回の宿題の回収、採点の要点→講義→第 5 回の宿題配布、解説という流れがある）を挙げていたが、この点も含め、いろいろと学ぶところが多かった。

その後、学生へのフィードバックをきめ細やかにすることは確かに望ましいが、教員の負担になるのではないかと、等のテーマで活発な議論が行われた。

4. コミュニケーション科目「情報リテラシー」分科会

司会・記録：林敏浩（共通教育コーディネーター・総合情報センター）

情報リテラシー分科会では、まず、情報リテラシー実施部会長である司会より、次年度「情報リテラシー」担当の教員向けに、授業設計の方針の説明がなされた。また、昨年度、今年度の授業実施は概ねうまく行っていることが説明された。これに対して参加者からは、学生の ICT に関する知識レベル（レディネス）が異なるので、特によくわかっている学生にはつまらない科目になっている可能性が高い旨の発言があった。このため、授業評価では低スコアにつながり、「他の科目に比較して担当教員に不利になるのではないか」、「担当するのがいやがられている科目になっていないか」という指摘があった。今後の方向性として、「高校までに一定の知識習得はされているので、基本的にはリメディアル教育ではどうか」、「TOEIC 得点に基づく単位認定と同様な制度を導入してはどうか」などの意見があった。また、司会より、補助教材として香川大 Moodle で利用可能な e-Learning 教材やビデオ教材の紹介があり、参加者から「全学ライセンスの取得や継続を進めて欲しい」、「利用講習会を開いてほしい」などの意見があった。最後に自由討論を行い、大学入門ゼミとの内容調整や TA 予算の向上化（安定確保化）への要望などがあがった。

5. コミュニケーション科目「外国語」既修外国語分科会

司会・記録：長井克己（大学教育開発センター）

次年度開講科目のシラバス説明と意見交換を行った。

まず次年度開講科目のうち、1年生対象科目である Communicative English I / II と2年生対象科目である Communicative English III / IVのシラバスについて、岩中教員（大学教育開発センター）から説明があった。教科書の選択方法、評価の統一、シラバス記載上の注意など、担当教員が必要な情報を資料を基に確認した。

またネクストプログラムに関して、e-learning システムのバージョンアップが行われ、学外からの学習も可能となっていることが水野教員（経済学部）から紹介された。

[参加者アンケート集計]

本研修会を受けて参考になったところ、お感じになったところなどをお書きください。

- ・全学共通教育の必要性を再認識した
- ・来年度の情報リテラシーを担当するにあたって気になっている点をお聞きすることができた
- ・「全学共通科目履修状況について」の報告が興味深かった
- ・FD の出席者が少ないとのことであったが、なぜなのか気になった
- ・「心理学」の履修者がかなり多いようであるが、受講生の満足度はどうなのか気になった
- ・「全学共通科目履修状況」において、文系学部生は人文科学科目に、理系学部学生は、自然科学科目に偏りすぎているのには驚いた。改善する必要があると感じる
- ・英語以外の言語の必要性をもっと認識すべきなのでは
香川県でも多言語で生活・会話している人達が多くいるのではないか
- ・身近にあるであろう様々な機会を活用できるような工夫が大学でできないのか教えてもらいたい
- ・相関図については、講師の立場から見ると関係が薄いように思われた
- ・全学共通科目の現状について理解するのに役立った。この資料は研修会に参加しない教員も入手可能なようにすればいいと思う
- ・相関図の提案と課題、学生の共通科目選択状況の実態把握と全学共通のあり方など興味深い報告でした
- ・研修目的に沿った研修とはほど遠いように思う。もっと短く何を伝える FD かを考えて実施して欲しい
- ・参加者数が少ないのは、参加意欲をかき立てるものがなくなっているためではないでしょうか
- ・実際にどのような講義・演習が行われているか、よくわからないので公開授業等に参加する必要性を感じた

その他、本研修会や教育FD活動、全学共通教育のあり方、あるいは広く本学の教育に関して望むことなどがございましたら、ご自由にお書きください。

- ・主題Bのサブテーマの設定について、改善して欲しい
- ・シラバスの様式について見直しを諮って欲しい（概要・目的・到達目標はほぼ内容が重複し、学生にもあまり読まれていないので）
- ・主題科目は、もう少し提供数を減らしてはどうか
- ・学問基礎の分科会は、初めて授業を担当する教員とベテラン教員との情報交換会でした。これが実は役に立つと思います。
- ・FD の時間が長いと思います。スキルアップ講座は 90 分ではなく、60 分のを増やして欲しいです。